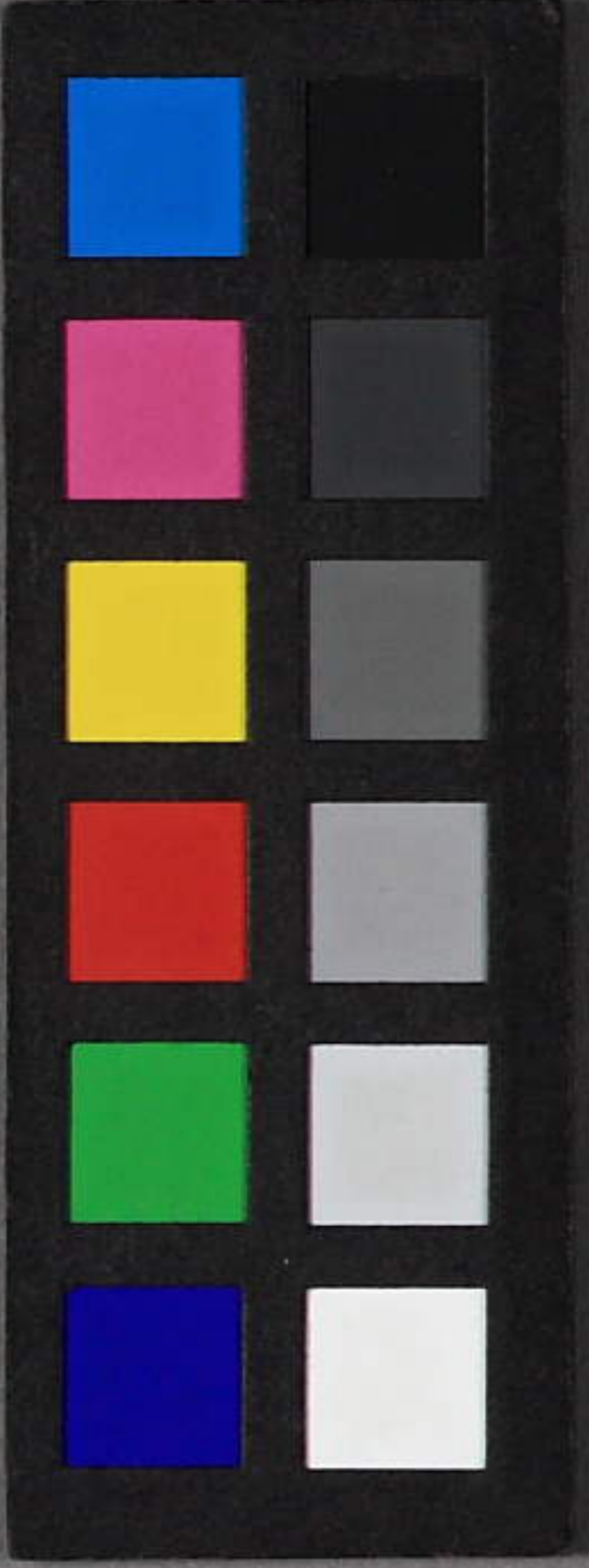


ゴカクタホ  
景天籠

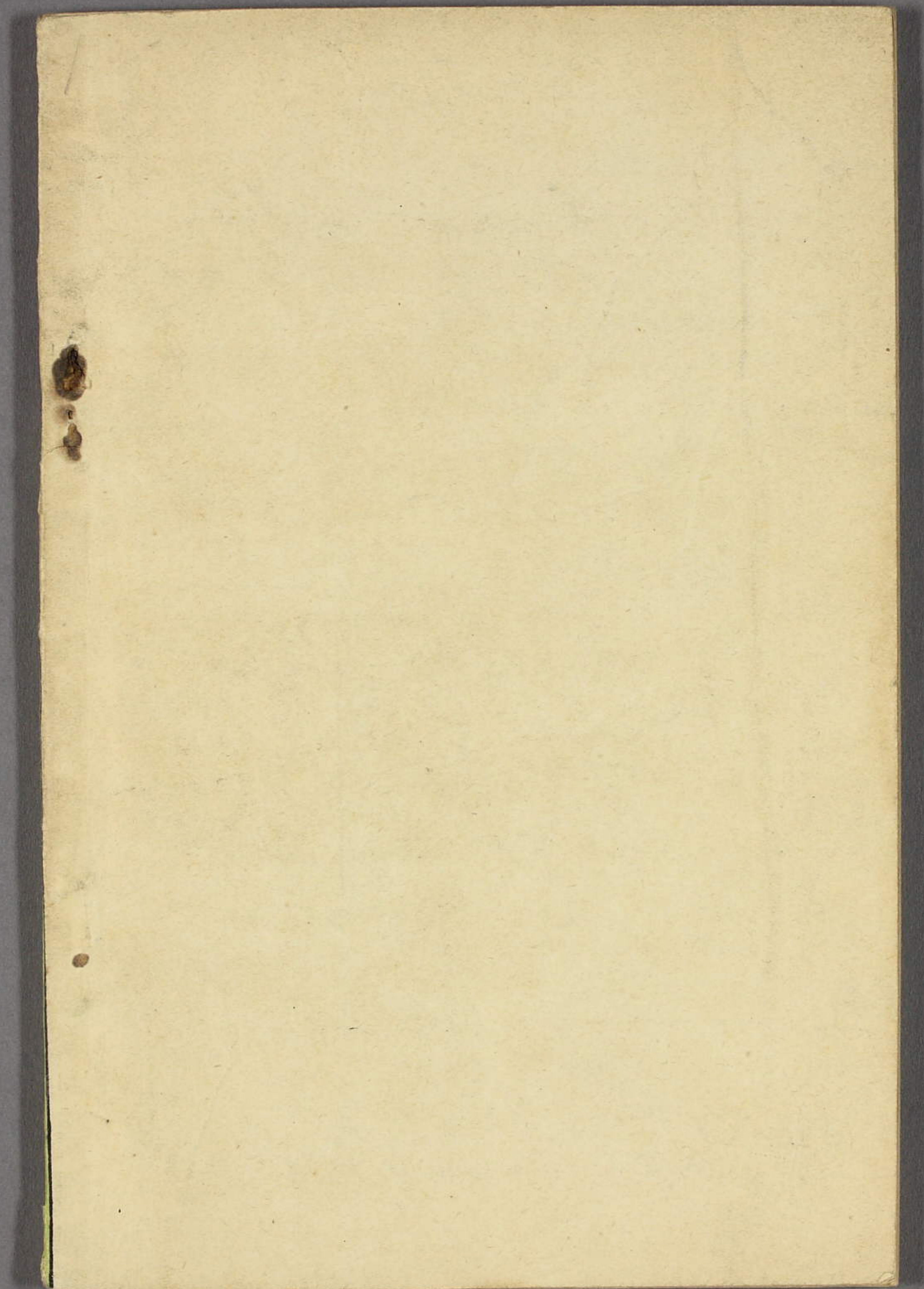
宝篋神女

















景天籠序

文を賣るは古來文人の常かり、然れ共心頭の  
肉を糶し得て以て衣食の資となす、悲痛事な  
らずとせず。若しこれをして二項の田あらし  
めば、誰か敢て鬆筆乾墨その數字を以て升米  
に換んや、亦むを得ざれば也。菟豆の資に窮  
せざるもの、梨棗に災して千秋を期する、吾  
人更に之に與せず。文の傳ふると傳へざると  
は共に命なり、百代にして傳ふるもの一出し  
萬人にして傳ふべきもの一出す、今曠世の才



非常の稟なくして卒然紙に臨み、筆を抜き、然も不朽を必ずといふ、亦謬らずや。金に觸れ石に刻するもの尙往々にして泯ぶ、一片の楮墨豈に泥となり灰となる劫數を免れ得んや。富樫蟠神子は文を賣るものか知らず。文を傳ふるものか又知らず。吾人未だその人を識らず、併せてその文を讀まず、如何んを彼の意の文を賣るにあるか、文を傳ふるにあるかを審にせん。只それ子は才に敏にして文を能くするといふ、うの文を刊する亦自ら信ずる所あるものに似たり。傳不傳は皆命なり命の回し

難きを知りて尙職の苟もすべからざるもを覺り、こゝに木に刻して茫々たる氣數の上に托す、文を以て職事とするもの、意氣實に此の如くならざるべからず。然も此の如くにして文を賣るも可し、文を傳ふる亦不可なしとせん歟。

明治三十七年三月

檜山書屋に於て

香 峯 生



序

景天籠中に螢の光有りといふにはあらず、また小女の手に掲げられんどの野心にもあらず、況や軒につるされたる螢籠の如く高さに置かれて眺められむとの出過ぎたる望にもをさくあらず。唯々是を反古にして螢袋を作り籠に代へられ中に愛らばさももの、一疋にてお入れ給はゞ、それにて足れりといかひふ。

明治甲辰春

高畑の里にて

著者識す



目 録

○襖(小説)……………九

○寢顔(小説)……………九

○過度期(小説)……………一七

○唐櫃山(噺)……………二一

○平家暨美文)……………二四

○幽霊の道伴れ(噺)……………二七

○大なる情死(詩的事實)……………三二

○舌頭螺旋行(隨筆)……………三七

○奸者の福音(理屈)……………四四

○蚯蚓の小歌……………四八

○答菊村氏……………五三

○日晡れて路遠し、此脚氣足を如何(美文)……………五八



- 洛如花(新體詩)……………六一
- 笛(新體詩)……………七〇
- 自由の賦(新體詩)……………七一
- 神居古潭(新體詩)……………七四



襖

別に大した事が無いのだ、唯四枚の襖骨格は本で其に紙を張りつけて表面には何處の畫伯が一杯氣元の禿筆樂書やら、山水とは名ばかり、病樹に瘤が附いた様に飛んだ處に筆力勇健は此處ぞと力み、山、河、草木先づそれらしく見ゆるから宜しとしても、高天ヶ原から鐵の鎖宜しくといふ趣意で雁やら鳥やら金槌の形した頭を幾個ともなく並へて此翼で能く飛んで居るものだと先づ見る目も勞れる様な拙きぶり、是が襖の繪である。四枚の襖に付ての説明は是で盡きて居る、然るに何んたる因果な事であらう此素人下宿屋の四疊半の間と六疊間との境に立てられて居るといふ一事が、此襖をして或は蛇蝎の如く、或は惡魔の如く憎まるゝ様にせしめた原因であるとは其處に又深い理由があるのだ。

四疊半の主人公は清水春江といふ女子大學の學生で、年は十八だといふが正月生れやら餘程老けて見ゆる。髪は例の何結ひとかいふ龍卷きの天上する様なもの、其



に小さな白いリボンをポツとさして、顔は拜む程でも無いか、兎に角日本美人を召集すと令状が下つたならば「妾も行かなけりやいけませんのネ」と出さうな、何處となく紺皮の抜けた先づ海老茶輩中の粹なものである。

さて六疊の主人公はといへば、年の頃二十三四髪を奇麗にチツクで分けた色は黒とも附かず、白とも附かず黄色人種の好模範ともいふ様な顔に、銀縁の近眼鏡を異様に輝かし、容貌のスラリとした瘦形の男。聞けば地方の縣廳から派遣に成て居る、神田測量學校専修科の學生藤井良助といふ者だそうだが、是も男と女との違ひこそあれ、四疊半の主人公と性格に於ては格別大差が無い方であらうと思はる、向きの人。

此處に於てか小説的の事情が其間に起るのも無理のない話である。

此下宿屋に來たのは春江の方が先で、良助はそれより半年も後に來たのであるが、良助が來た其翌朝である、顔洗場で春江が是迄見た事の無い丈のスラリとした、顔は得ならぬ愛嬌のある所謂「好い男」なるものが目に附いたので、娘心の浮氣か

ら一目見るから惚れくして終つて、蔭ながら此男が何處の室に居るだらうと氣を付けて居ると、丁度其姿が自分の室の直ぐ隣りの室に這入て消れたのを、初めは唯夢の様で眞實だとは思はれなかつたが、昨日自分が學校へ行く時迄確に虚であつた隣の室から今しも朗かな聲で讀書するのが聞けたので、それではあの御方が昨夜から此方へ來たのだと解つて見ると、何處と無く頼もしい様な、嬉し様な、先づ心安いふ様な心持がせられてあつたのだ。

此様にして清水春江は藤井良助を戀したのであつたが、幾程性質がなんでも、全くの他人然も男女の間、用事も無いのに言葉を交すことは逆も出來ないから親しく成りたくとも其動機が無く、襖一重の蔭に戀人を置いて、春江は徒らに思をのみ煮やして居つた。それに付けても此襖さへ無かつたならば、隣の室との往來も自由で今頃は疾に打解けて親しく成てあつたかも知れないのに、果ては罪の無い襖までが怨めしく思はれるのである。

此襖!! 釘を打ちつけてあるでもない、錠を降してあるでもない、妾の此細い手で



唯靜かに引けば開かるのだが、理由も無く他人の室を開ける事もなるまい。「今日は」と言つて開けやうか？ なんだか物賣の様だ。「只今の御歸りですか」と言つて開けやうか？ これぢやあんまりあの御方の奥様にでも成り澄した様で變だし。ヨシ、「貴方餘り禮失ですがナイフを一寸御貸しなして彼下い」と出て見やうか？ 妾の處にはナイフがあるのには是も可笑しい。「失禮ですか貴方時計は今何時頃でしやうか妾の時計が留まつて居りまして」とやつて見やうか？ 臺處のボン／＼時計が聞えるのは是も妙でない。さて如何やつたものであらうと種々考へたが別は是ぞとした名案も出ない。殆んど窮して居つた時にホツと胸に浮んだのは、朝に起きた折に「御早うござんす」といふ事である。是が一番穩當で且つ名案だと思はれたので、明朝起きたならば取り敢ず是を實行しやうと決めた。

さて翌朝に成て「御早うござんす」と出やうと思つて襖に手を懸けて見たが、今更に胸がドキ／＼して、手が震ひで、逆も開ける事が出来なかつた。其翌日も翌々日も我と我身を勵ましたけれども、遂に氣後れがして開ける事が出来なかつた。

其後春江は此襖を見ること恰も金城鐵壁の如く侵すべからざる一種の恐るべきものとして迎えるやうに成つた。

天の河の流は深くとも牽牛織女の女星男星は時有て相逢ふものを。嗚呼此四枚の襖長へに若き男女二人の路の邪魔をなして、四疊半と六疊間の間に毅然として嚴正中立を保つてあらうか？ 是は恐らく襖自身も知らぬ話であらう。

良助が來てから二ヶ月計りば互に言葉を交すの時が無くて過ぎた。元より其間には顔洗場や廊下などでハタと出逢て目に思を交換した事や、春江が遣る瀬無き戀を訴へんとして良助の聞かよがしに手風琴を鳴ならした事や、如何な心でやるか知れないが、良助が其鮮明りした聲でアメリカヤン、マーチを歌ふのが聞かた等の事は度々あつた。

するや或日の事、良助が學校から歸つて布巾敷包を和の上の投げつけて和服に着更へやうと今しも洋服の上着を脱ぎ去らんとした時に、突然隣の春江の室からたゞならぬ唸り聲が聞かたので脱ぐ手を止めて耳を澄すと、其が正しく春江の苦しむ唸り



聲である。其内に

「藤井さん!! 藤井さん!! 何卒……何卒……ア、苦しい」といふ聲、自分の姓を呼ばれて妙な感を感じながら、良助は、大急ぎ襦を開けて隣の室へ騒げつけて見ると、春江はしどろ無き姿に打伏して大變に苦んで居るのである。

良「如何なさいました?」

春「ア、苦しい」

良「何處が苦しいとちつしやるんです?」

春「下腹が……苦しいッ」

良「下腹が苦しいといふんですか?」

春「はい……」

良「それは御氣毒ですなア……醫者を呼びまじやうか?」

春「御醫者さんなんかいらぬわ、失禮ですが貴方一寸揉んでくださいな!」

良「醫者はいらんですかなア……ぢや兎に角揉んで上げまじやう、此武骨な手では

却てなんだかも知れませんが」

良助は春江に寄り添へ懐から手を入れて臍のあたりを撫で

良「何處らです苦しい處は、此邊ですか?」

春「はいもうチツと下……」

春江は良助に下腹を揉ませながら氣分が能くなつたものが、目を細くして至て静かにして居たが、暫く立て又急に

春「ア、苦しいッ何卒もう少し上を揉んで……ア、苦し」と肩息を吐く

言ふが儘に少し下を揉んでやると

春「もうチツと下を……」

良「是よりも下ですかア……と」

目を圓くする。

春江の急病は良助の揉み療治一つで直に癒り其翌日からといふものは、四疊半の間



と六疊間どの境の襖は散々嚴正中立を蹂躪され、何時も開け通して夜に成ても閉て  
られたことが無いやうに成てあつたこと。

藤井良助は今某縣廳の月俸三拾五圓取りの官吏であるが、其奥様の御前名はと聞く  
と、確か春江さんとかとつたッけとは餘り話の上首尾で眞實だとは思はれないが、  
其が眞實だといふから驚くではおませんか？

お娘さんと春風

梅ちゃん梅ちゃん御前さんの花を見るといふも初心な様でよいことね、殊に日陰に  
ぼつらぼつらと、人目を忍んで居るのなどは、罪が無くつてほんまによいこ  
とねと、言はれた至て初心な梅の花がありましたとさ、然るに春も過ぎて、秋が來  
て、梅ちゃんも年が行き、今迄花の咲いて有つた趾には實がなりました。先きに梅  
ちゃんの初心な花を見て樂んだ人方がやつて來て此梅ちゃんの實を味いて見ると、  
一種の酸味を覚えて居つて、すつぱくつてとても食べられませんでした、そこで此  
人方が、梅ちゃんに向て、春見た折は非常に初心な花であつたのに、なぜ今はこ  
んなあさましい酸味たつぷりのすっぱい實になりましたと、問ひました。すると梅  
ちゃん、萎るゝ様で頭をうなだれて、答へて言ひますには、「ハイ今妾が這際あさ  
ましい身になつたのも、皆もとけさいへば花盛りの若い時分に、餘り春風を吹かせ  
過ぎたからです」と、今更前の非を悔ゆる様でしたとさ、世間の若い未だ初心でいら  
つしやるお娘さん方よ、御前様方も今の様に至て無邪氣な内は、なるべく御前さん  
の方に向いて吹いて行く春風には、勤めてさけてあたらない様にしなさい、そうし  
ないと、此梅ちゃんの様に、後で酸味を帯びた實になりますよ。

寝顔

柱無き細緒を搔き手繰るが如しといふにはあらで、細く長き袋の中に己が身の容れ  
らるゝと思ふや、森と底に沈み行くが如く、然も長さ幾萬尺有るものか、其滑か  
なる心地能き袋の内を、目を瞑りて滑りゝ落ち行くに、停まるべくも思はれず。  
此儘に極樂といふ處に行くに非ずやと靜かに目を開けば、袋の内は五色のアルノボ  
ウ式の棒にて、上から下迄奇麗にメラゝ彩色せられてある。耳を澄せば、袋の外  
の方に當りて、茅葺の屋根に春雨の降るが如き音のするなり。間も無く、其首次第  
に高くなりて、袋の内に彩色せられたる五色の棒、俄かに動き始むると見るや、繩  
を細ふが如く、赤、紫、黄等の棒が互々に入り亂れ、搦み附き、蠢き出すよと思ふ  
や、四面甚だ騒々しくなりて、蒸熱きが如く感ぜらるゝに、温きものゝボタリゝ  
顔に振り懸るよと覺て、上を仰げば、其は袋の龜か上より降り來る五色の雨にて  
ぞありける。ワツと壞れたる女の泣き聲に、目を醒せば鈴畑五郎は、其妻の膝を枕



に眠つて居たのであつた。突如と起きあがつた五郎、疑惑の目を視張り、

「如何したく……オ、コレお津や如何した？」

「……………」

「如何した……………コレコレ？」

「……………」

「御前泣いて居るんだな」

「……………」

「一體如何したといふんだよ？」

「……………」

「泣くなんて……オイ、如何したといふんだ、何處か苦しいとでもいふのか、それとも何か……………？」

「……………」

「唯泣いて計り居つたつて仕方が無いじやないか、話せといふに、何も一人で泣いて

とけ無い、已に其理由を聞かしたつて宜いだらう……………」

「……………」

「然し已には絶が話されんといふ特別の理由が有て、泣くといふなら又格別だが、御前はそんな僕に話す事が出来んといふ様な秘密は無い筈じやツたが……………」

「……………」

「止せといふに泣くのは！見ツとも無い！」

極めて不興顔に、五郎は俯向いて居る妻のお津やを襟首越しにザツと瞰下するのであつた。

「何も遠慮も隠す事も無い、主婦の間だ……言は、御前の心配は己の心配だ……………ナアそふだらう？」

「……………」

お津やは始めて少しく頭を擡げ、

「とふ言つてくださると、幸猶も澄まないんですもの」と又額垂る、

「何が澄まないと言ふんだ？」







ります、とふせ殺す氣でしたら、貴方の不情が身に泌み込まない内、妾が此方へ來てから間も無くやつて終ふところで有つたかも知れませんが、其れでは世間の疑を起すと思つて延ばして置いたのが、貴方に取ての幸福又妾に取ての幸福の元で其内にも情が滲々身に應へて來る、遂に手を出し兼ねて居ると、今日此通り御酒を召し飲つて御用でに成り、妾の膝を枕にして御眠りに成つた、其時に妾の悪心が又自然と鳴の様に鐘首を鳴けて、今にも貴方が目が覺めて喉が咽いたから水を一杯取れども言つたら、其時こそ、素知らぬ顔に其茶碗の中へ此毒薬を入れて飲ませやうと、實はハ、今に至て何を隠す事は有りません、ソツと袖へ手を遣て見ました。其と知ると昔方け今にも其身を食ひ殺さふとして居る鬼の膝を枕に何の心置きも無くスヤ／＼と眠つて居られる……そふして其間に如何な夢を見られたのか唐々々々面白さふに夢爾々々と笑ていらつりやるんです。スルと思議なのには、昔を凝つ々睨て居つた辛の目が、何時の間にか然と曇て來たやうに思はれて、今迄け人の顔であつた昔方の御顔が、如何見ても菩薩の様な尊い顔としか見えない

く成つたんです。それは、眞實に罪の無い尊い顔で、妾の様な根性の曲たものは凝乎として見て居られ無く成て來るです。スルと俄かに妾の胸の内には何物かの葛藤が起つた様に、非常に苦しく成て何處からとも無く、

「悔い改めよ！、悔い改めよ！」と

いふ聲が聞けた様に思はれまして、胸の動悸が大變に強く搏ち出して、其動悸の調子と合せて、其「悔い改めよ！悔い改めよ！」といふ聲が、攻め太鼓の様に大きく成るです今にも妾胸が張り裂けるのかと思はれて、ワツと貴方の寝顔の上に泣き伏しました、其時にはもふ其「悔い改めよ！」といふ聲が、妾の周圍にグル／＼と輻をなして、此室一面に廣かつて居りました……。それで妾も是迄の恐しい考は、悉皆り貴方に打明けて、此身体は何卒今日限り離縁をして頂いて、前の奥様を元の通りしてくださる様にと、實は此様にガラリ打明けました次第ですから、何卒妾だと思つて是迄の罪は赦しに成て只今限り離縁をしてください。妾は是から尼にでも取て一生を送ります」との長々しき懺悔。



其後五郎と津やとは日増しに睦しさが益して、今では淋しき元の二人暮しでは無く、其若い夫婦の間には、何時か玉の様な男の子が出来て、世間からは「鈴畑の家」といふ熟語は夫婦の中が睦しいといふ事を意味されて、珍らしい家庭だとして羨まれて居る (完)

▲あの子

思ひ出すとは忘るゝ故に、  
 思ひ通しの思ひには、  
 めの予思ふて白日暗く、  
 まして雨天のつれづれならも、  
 白くかばそきかになて、  
 酔漬にされし其果ても、  
 馬鹿ぢや馬鹿ぢやと知りつゝも、  
 譽も名をも抛ちて、  
 儘よ寐びたる人の世に、  
 慰め呉るゝ者あらば、

思ひ出さぬは思はねば、  
 忘るゝ暇も無かりけり。  
 男一疋腐り居る、  
 泣いて暮すも無理も無し。  
 此身散々さいなまれ、  
 笑ふて見せた私の馬鹿。  
 まさまさ馬鹿になりたいと、  
 あの子を抱きしめ身なり。  
 人の譏りは兎も角も、  
 此身も呉れて遣らふわい。

過度期

(上)

何の糞人牛五十仰るか俯むかの一六勝負泣いて居る計りが藝でも無い、碎けて笑ふのが男子の本分、這麼事で厭世など、出懸けるもチト仰々しい、元から儘に成らぬと相場の確定つた世の中だ、其れよ一人生の行路は蹉跎の連鎖のみ人は到底此の外に出でざるなり、荒漠たる人生の途上唯正に奮闘して進往直進すべし、倒れ恥められ熱涙を揮ひ悔悟を發し奮勵して再び起ち更に前途を目がけて戦はざるべからず、而して其戦の誠實不屈なるや否やは問題中の問題なり「カーライル先生中々甘い事を吐し居る。其問題中の問題なり」が大問題だが何に關ふ事は無い、どふせ世の中が戦場なら僕の様には疵だらつつけに成た奴が却て尊い武士かも知れぬ……○此相川卓藏の辯護士試験も早い話だ此度で四度目か、然も其が又落弟と来たから詰り大疵が四つも附いたわけだが、斯う續け搏ちにされては何程荒武者でも颯の頭宜



しくで遂に甲の中へチチンと縮みそふだ。然し此處で縮めて終つちや男振りが悪い  
ドレもふ一度踏張つて見やふか……と言つた處で憲法何條なりも口にタコが寄つ  
た。

下宿屋の四疊半にて卓藏君頗る撓げて見たり。

(中)

婀娜きし聲にて

「相川さん」

一心に讀書して居る卓藏振り向きもせず

「誰だ？」

「ア—ラ巡查さんの様に誰だなんて妾ですよ」

「いかん／＼、今日はいかん」

「オヤ可笑いね」

「何も可笑い事は無い……いかん」と

聲高まる、

「いかんつて何が……貴方今日はどうかして？」

「失敬な歸れ」

「そんな毒辭なんか使つて怖いこと」と

袖を顔にあて、横を向く

「兎に角今日チト勉強しなければならんこともあるから歸つて貰ふことにする」と

彌々落付きたる聲、

「それぢや貴方何處かに良いのが出来て私の様なものはチヤンと御拂ひ箱に……」

「まあそんな馬鹿な事は言はずに何卒今日は釋當に歸つて呉れ」

言ひ含めるが如き語氣、

「如何しても歸れとおしやるですか」

首を斜にして覗く

「何卒そふして貰ふ」



明瞭と言ひ放つ、

「ぢや是で歸りますわ大變御邪魔でしたね……後で緩りタンと御樂みなさいなよ、  
やうなら」と

ツンと立つたが心の騒ぎを外に見せずと殊更に平氣を粧ふて、障子などは間緩い程  
静かに開閉して裾捌きの音もしとやかにやがて階子を降り行くと  
下に

「おきみさんもふる歸り？今日は大變にお早ふござんすことね」と  
是は下婢の聲。

(下)

自分の戀人おきみを碌に話もせず逐ひ出した翌日、相川卓藏は俄かに宿替へをす  
るとして是迄の下宿屋を去つたが、行先は誰にも話さなかつた、又誰一人として其を  
知つた者が無かつた………後一年立て官報が辯護士試験及第者の姓名を列記  
した時に、其の始から五六人目の所に相川卓藏の名が明瞭に記載せられてあつた。

唐櫃山

秋田縣仙北郡の南端に金澤といふ所が有る、此處が彼の清原武衡家衡の立籠つた有  
名な金澤の柵のあつた處で、聳拔けて高い山としては無いが一体に極めて峻嶒な巒  
嵒たる臥羽山脈の支脈が犀風の様に並んで、其下を名代の厨河が細く静かに流れて  
居る。鎌合権五郎が矢を射られ目の玉の血を洗つたのも此河で、爲に棲んで居る鵜  
が皆今に一目眇だと言はれて居る。河を渡り西南の方に山路を辿り行く事、二十町  
計りにして一寸した平地に出る。向に名は忘れたが戦が破れた時に、武衡の隠れた  
場所だと傳へられて居る葦の澤山に生へて沼がある。其又沼を隔て遙かに、眞黒く  
杉樫柳等の大木を以て鬱として透も無く覆はれた丁度造り損ねた摺鉢の様に、ガバ  
ツと、伏さつて見ゆるのが即ち唐櫃山。

毎午舊曆六月の二十五日辰の刻に成ると、此唐櫃山でギィーウといふ恐ろしい音が  
する。此音が何であるかといふと、金澤の柵が陥つた時に、義家公が、一敵の武衡家  
柵以下諸名士の着て居つた鎧や錦の下袴及び分捕の貴重なる寶物などを盡く幅三間に



高さ二間奥行一間半の大きな鐵の唐櫃に入れて此山の奥の誰も知らぬ處に、櫃の上だけを少し現し埋めて置いたのが今に其儘残て居て、毎年即ち前申した舊曆の六月二十五日辰の刻に成ると、此大きな唐櫃が中に這入てある品物を蟲乾する爲に、自然獨り何百貫目あるか知れない其重い蓋が、ギィーウといふ音と共に開くのだ。シテ不思議なのは其日け程天氣の悪い日でも、此唐櫃の開く音がすると俄かに雨は晴れ雲は收まり、御日様が赫々と照り初めるとの事。其故に金澤の村では六月二十五日に何處の家でも皆残らず蟲乾をする習慣に成て居る。

然るに昔此金澤の村に然の深い婆があつて、唐櫃山の寶物は一品取ても價にすれば大したものだらふヨシ其を一ツ盗み出して呉れやふとの悪い考を起し、或年の六月二十五日に朝早く起きて大きな麻布呂敷を持ち、曲つた腰を撫でながら慾一ツに引張られて唐櫃山に出掛け、道も無きに藪を掻き分け、奥へ奥へと這入り込み、彼方此方と目を皿にして残り無く探した結果ヤツとの事に、堅固に蓋された大きな唐櫃を山の窪み所に見出したから、大喜びで先づ兎に角其傍に座り、勞れた腰を休

め、未だ辰の刻迄は間があるといふので、中の品物を想像に浮べなぞして蓋の開くのを今か／＼と待つて居た。

すると案に違はず辰の刻になると山が全体で震ふ様な恐ろしい音がしたかと思ふと見る／＼櫃の蓋が上にギィーウと揚つた。其音に驚いて一時は慾も何も忘れて土に伏し小さく成つた婆、恐ろしい音が止むと間も無く、ズル／＼櫃に滑り寄て怖る怖る中を覗いた。見ると寶も寶、錦、金鑲、金銀の金具の光が輝々として目を射たので婆はホッ／＼喜び大布呂敷を其處に廣げ、櫃の内に首を突き入れ手を差延べ、錦の下着、金鑲の旗等手當り次第引き出し、此度は金銀の飾付きたる鞆形の兜に手を懸けた。中々重いので漸くの事して今しも引き上げんとした、時しもあれ今迄開いて居つた蓋が突然非常なる勢で上からオダンと落ちて蓋をした。無残や、婆の首と手は其重き蓋に噛み切られ櫃の中へボロリ。

洗つた様な六月二十五日の晴天が俄かにかき曇て恐ろしき空模様と成り、大雨が恰も盆を覆したやふに降りだし尉河が溢れた。



平家蟹

夏の日長うつらく、眠氣を催さる、折しも、一直線に突き込みしは「今日は」の晴々しき聲。見れば千金丹と大書したる白き蝙蝠傘を轉々廻しながら、脚胖草鞋の輕き旅装年の頃二十四五の色淺黒き男戸口に立てり。自分は卽座是が越中富山の巢より蛛の子の如く諸國に散らばりし其一疋よなと鎖きぬ。越中辯の面白きに惚れ込みチト多き程買求めけるに、彼の景物なりとて鞆の中の包より勿体らしく出し呉れしは不動尊の顔其儘の形したる赤き平家蟹の甲なり。門の邊より吞氣なる聲にて彼の投げ行きし唄も次第に聞かず成るや、家の内は濕をうちたるが如く殊更靜かに思はれて、庭の葦の音のみいと汗にて鼓膜を打つなり。此時冷かなる平家蟹を握りし已は餘り心持よきものにあらざりき。

關の中より夜叉の火を吐くかと思れば、恐ろしき地響きして走り來るものあり。あわやと思ひて地にひれ伏し縮み居るに、我前を過ぐるは四足の大きな動物なり。

其數幾百あるものか、白きもの黒きもの鹿毛なるもの續きく行くなり。已を害せんとする様も無きに、少しく目を上ぐれば、其は山の如き大なる牛の、角には皆焔々と燃えあがる炬火を結び附けられたるが、土砂を蹴飛ばししくいと狂はしき様に走り行くなり。

悲鳴叫喚の聲物凄く、地獄の釜の煮たつかと思はる、ばかり、牛の聲、人の聲、すさまじく、逃げ道を失ひて幾千尺の險崖を眞倒に谷へと突き落さるゝもの其數を知らず。間も無き内に此處俱利加羅の谷は、鎧武者の屍を以て埋められぬ。

悠々たる自然は此大悲劇をも知らざるもの、如く、山の一方叢々として雲起ると見るや、程もあらせすなだれく、漠として俱利加羅谷を掩へぬ。然るに自然の變化は暫くも留まらばこそ、一陣の山嵐としてたち、一點の雲をも留めず俱利加羅の谷底を吹き拂ひたるに、瞰下るせば、堆く重りく、雲に蒸されたる鎧武者の屍は、何處に消は失せしものか一の影さへあらで、唯澄みたる水の底に薄朱き甲にて堅固に鎧ひたる幾百とも數知れぬ澤蟹の樂しげに遊び居るのみ。



枕刀の志津三郎蔓として聲あるに目覺めれば、千金丹賣より貰ひし平家蟹、霜凍る名刀の齒に緊と噛み付き居たり。

## ▲梅

梅蹊に羽無き道士ころころと  
梅が香を籬に盗む茶の頭巾  
俗に知り短冊さげて見る梅や  
破れ草鞋懸りて見ゆる里の梅  
猫眠る日向の縁に梅白し  
風流はそんなものかと梅笑ひ  
梅咲いて土に私語する雨を聞く  
俠客の裾風薫る江戸の梅  
梅咲いて隠居が顔の珍らしや  
籠には大和心を梅として

## ▲冬木立

寒月を疎らに碎く冬木立  
ゴングと撞く鐘に雪散る木立いな  
清正の兜脱ぎたる冬木立  
吹雪にて碁をぼかした冬木立  
灰空を帯く様に立つ冬木立

## 幽霊の道伴れ (實談)

處は羽後の國北秋田郡十二所町が未だ今日の穢な町の形を成さない今より餘程前の話です兎に角此話とても僕が祖父の存命中に其口から語り、聞かされたもので、然も祖父が弱年の時の出來事だといふから、不足でも今から六七十年も以前の話。其十二所といふ村に木挽を業として居た日景某といふ者が住んで居つた年の頃は未だ不或迄は六七年の間が有る働き盛りの壯年家内としては兩親は疾に死んで終つて自分の妻と其間に出來たいかに姉妹だつて何故して如斯に中が睦いだらうと怪しまるゝ程の四歳と二歳に成る二人の娘子ばかりの四人暮し。だから夫が木挽をした料で、分相應の暮しをして行くには何の不足も無く、夫婦の間には言ふに言はれぬ樂が何處やらに潛んで居るらしく思はれた。然るに非常に愛して居つた二人の子供の内、姉娘の方が、一寸した風邪が元と成て熱が出て悪性の窒扶斯病と成り、遂には近郷一等のドクトル先生の療治も甲斐が無く、返らぬ旅路へと六文錢を餞別に貰て出立する事と成た。父母の悲といつたら其は大したもんで有たが、悲でばかり居た處



で死だ子が蘇生した話は昔から聞いた事が無いといふので死駭は箱棺といふ屋根の無い粗末な棺に納めて、庵寺の坊様のしむがれこま皸枯聲に葬式もそこへ濟し、自分の内から程遠からぬ共同墓地へ埋葬したのであつた。

夫は其後不挽には勢が出ないといふて四五日休み、それから初めて仕事に出懸けた。丁度仕事に出る様に成てから二三日目の日である、夫の歸宅が餘り遅いといふので、婦は心待ちに待ちながら薄暗い行燈の下に、今は一人娘と成た妹娘を背負て針仕事に目を晒して居つた。時は丁度夏の中ば頃で蒸し熱いから周圍の窓障子を皆開け放して行燈の外をクルクル廻る二疋の蛾を煩いとも思はず、鬢の後れ毛を垂れ俯いて針を運で居た。

蒸し熱かつた空が。不平顔をして居た奴が堪に切れなく成てプツリノノ小言を言ひ始めた様に。ポツリノノと雨を洩し始めて。間も無く細い白い雨がコソコソと初嫁の獨語の様な音をたて、軒一面を取捲いて終ふと、今迄は尻を上に向けて勢能く飛んで居た螢も濡れ萎れて尻を下にし、闇の夜に太郎作の煙管の鴈頭が煙りだした様に

思ひだしては歌り歌り。雨の中を彼方に縫ひ此方に縫ひ。覺束無げに飛んで居る。背中の子が俄かに冷々して來た様な氣持かするから、どふしたのかと背をいすぶつて見たが。眠て居たのかウーともスーとも音を出さない。其の内に子供は益々冷めて來て石の様に成たので。驚いて背中から降して見ると此は如何に、目は靜かに閉ぢ口元には得ならぬ微笑を漂べて、殆んど石地藏の様に堅く成て冷に死で居るとは？。

母は半分氣狂に成て、夫が居ないからどふする事も出來ず、先づ大急ぎ隣の家へ馳けつけた。すると隣の家の戸口でバツタリ出逢たのは茫乎と生靈を抜かれたやうに立て居た其家の女房である、母は震ひ聲を出して今の出來事を告げんとして口を切ると女房は其聲に始めて我に歸つたもの、如く「今氣味の悪い不思議な事が有つたよ」といふを冒頭に、御前の話などは先づ暫時さて措いて已の話を書いて呉れ否や聞かさずには置くものかといふ意氣込で。呼吸喘みしなから談り出すを聞くと、  
「今ネ、私か小便に出たんでしやう、するとネ、向の墓場の方から大きな青火の玉が



飛んで来るのヨ、オヤ／＼と思つて見て居る内に其がツン／＼此方へやつて来るんですもの、餘り氣味が悪く成て来て、妾わがし身体からだがチツとも動かなく成てネ、便所の柱にギツチリ抱き附いたの、スルと其青火の玉が妾わがしの方へは來ないで、御前様の家の軒の處で搖曳まぎして居てあつたか窓から内へツウと這入て終つたのよ。御前様も知らないで居たの、オヤ／＼!!、スルとネ間も無く火玉か又前に這入た窓から出て行くんですシテネ不思議なのは此度青火の玉が一つては無くつて二つてすの。前に這入た火玉か先に出て、續いて其半分位の小さな火玉が出てネ二つ揃て矢張墓場の方へ飛んで行くんです、そふして又不思議なのは能く視て居ると丁度先達御前様の子供を埋めた處へ火玉が二つ共這入て消れて終りましたヨ。雨に火玉の青光が映て墓場は皆鮮明に見えましたネ。確に這入た處か御前様の内の子供を埋めた處なの!! 妾わがし、餘り驚いたもんだから小便も何も出なく成て終つてヨし。と肩息吐き／＼の話。生前に餘り中か睦しかつたもんだから。自分一人死んであの世に行ては見たもの、自分の知つた遊び友達とては一人も居らぬといふので。此世に居た妹を誘ひ出した

もので。丁度母か針仕事をして居て背中の子が冷々する様に思つた時か。姉娘の火玉が背後うしろに來て妹を誘ひ出す處で有つた。(完)



#### ▲小野小町墳墓

秋田縣雄勝郡小野村は人家百五十計りの郷なり、此地は彼の文徳天皇の朝六歌仙にも入りし有名なる小野小町の生地にして、其墳墓も今猶ほ村より三四町離れたる處に有り、草茂る小さき岡に、青苔を絡む柵を周らし、内に寂しげに立てるは、高さ僅か二尺計りの石碑にして、扇を持ち昔の宮女の姿したる小町の像を刻めり。其側に一本の芍薬生ひたり。毎年時至りては、うつろひがちの色に花咲くなるべし。嗚呼己が容貌を自らも花と歌ひし小町も、我が身世にふるながめせしまに、何時しか花の色も移りて、目異る、若も無き姿に、死してより此處に幾百年、冷かなる石の下、業平はさて措き訪ふ人も無きかゝる處に、長く覺めざるの眠りを眠り居るかと思へば、又興覺むる心地せらるゝわざにあらずや。



大なる情死 (英文和譯)

(上) 鐘の響の聞き納め

三二

若き伊太利人に依て作られたる驚くべき妙音を發するところの鐘が、伊太利の北方愛らしきコウモウ湖畔なる或寺院に懸けられあつた。是を作らんとして若き伊太利人は、殆んど四五十年の長き星霜をそれへのみ費した程で、從て又其れに向ての報酬として受取りたる金高も不足なるものでは無かつた。然るに彼は其金を以て何をしたかと云ふと、慾などいふ醜い根性は少しも持て居らなかつたものと見れば、唯彼は其を以てコウモウ湖のほとりに小さき茅舎を買受け、其處で朝晩自分が能ふだけの精神を込めて作りあげた鐘の音韻を聞きながら、其音の中に至て靜かに前の報酬金を以て、彼の一生を終らうといふ罪の無いことを企てたのであつた。

彼は湖畔に鐘の音を唯一の樂みに何の苦も無く平和に暮した、然るに此平和なる暮は長く持續せられず、僅か一二年も立つたに突然其土地に反亂が起り、彼の藁屋は忽ち焼き拂はれ、彼の友は離散し、彼の金錢所有物は皆悉く掠め去らるゝと

いふ大不幸にでつくわした。然し此等の事柄は未だ彼をして悲ましむるには價しなかつたのである。彼はより一層大なる悲を悲まなければ出來ない様に餘義なくせらるゝの境涯に陥つたのだ。其は何んであるかとの間は發することを止め給へ。

寺院は打毀たれ、彼が第二の生命、即ち彼れ所愛の鐘が何者かに取去られ、さらに行衛の知れずになれることの一事である。

此處に於てか彼は狂したのだ、否少くとも狂者の如くに、友も無く家も無く、獨り飄然として全伊太利國を残り無く越えて徜徉ひ廻り、只管に鐘の行衛を覓めた。彼が死してある前に、せめては今一度なりとも己が作りし鐘の音を聞きたくものにこそは彼が終生唯一つの願望であつたので。或時は古き伽藍の軒下に大理石像をたたく雨の音を聞きつゝ、其處に旅の一夜を明かし、タイバル河畔を過ぎては夕風のたよりに響くビータア寺院の鐘の音を己が鐘の音にあらずやとたゞすみて、丘巒の翠綠を望むも、永久府城と誇稱したる往時を回想するの暇もなく、ロンバルデイの廣野を横切ても、レモンの花の麗しきには目を呉れず、ポー河に落ちる星影にも彼の

三三



足を留めず流浪し行くうち、ふと彼は遠く海を渡り來れる一の旅人に出逢た。旅人が話の序彼に語るに、我れアイルランド、リアリックに於て驚くべき鐘の妙音を聞きたりとの事を以てするや、彼は顔色を變へ俄かに震ひ上り、其こそ我が鐘ならめ、我が鐘を措きてさるもの、世界にあるべくも聞かず、斷然我が鐘に相違なしと深く確信する處有るもの、如く獨言を言ふた。

(下) 寂滅爲樂と響くなり

猶豫もあらばこそ、此伊太利人は直ちにアイルランドに向て航すること、決定し、汽船にてシヤンノン河口まで至つた。其所から彼は小さきボートを備うて其に乗り移り、目的地リマリックに達するまでは愛らしき夕の空を眺めながら、漕手の楫がパタツ、パタツと水面を打つのに無心に耳を傾けつゝ、背中を舷に凭せかけて、深く沈むが如き又眠氣を催すが如くなる心地よき船体の動搖に彼の身を任せて其河流を漕ぎ昇つた。河岸の景色はまるでからぐりの様に移り變つて行く、忽ち其處にセント、マアレース、カセドラルの-high塔が、漸次に薄暗く靄色し行く空に天を摩

して突つ立て居る所のめざましき光景が出現した。漕手の無風流者も此岸の好景にはさすが暫時は見惚れれものを見つて、漕ぐ事をトンと忘れ、楫の音が止んだので舟は一時寧ろ恐ろしき程ひつそりと成つた。其時俄然、塔の上から恰も妖術を以て迷はず如く、静まりかへつたあたりの空氣に奇妙なる波振動を傳へて響き來る音樂的の異様の好調が、彼の耳底に非常なる魔力を以て達した。嗚呼此響こそ疑も無く彼が作り鑄た鐘の音にてあつたのだ。そうして其音が此伊太利人が昔の幸なりし湖畔の古き記憶を、いとあざやかに再び彼が腦中に思ひ浮ばしむるやうに彼が身に作用を起したのみならず、又彼れ伊太利人が終生唯一の願望をして此處に透徹せしめたのである。憐なる伊太利人は、嬉しさの餘り悲みの境に唯泣いた。

間も無く舟が着き、楫を止めて舟人が、上陸すべく彼を待つたが……噫々それはどうて駄目であつた。其の音を聞いた時に、たどしへ無き喜びと、又一種の悲みとが彼の心を自在に掻き亂し、全身の血を弄んだのである。間も無く固く凝結せんとする彼の血潮が、其瞬時如何に躍つたであらう、彼の最大目的はまのあたり今達せ



られたのである、そうして同時に彼は……死んだ……鐘の音と共に此上なき大なる情死を遂げた……影黒きカセドラルの塔を視つめつ、彼の面にはいしらぬ満足の色を以て冷かに死んで居つたのだ。げに其鐘の音こそは、彼が一生のあらゆる希望と快樂とに償したものであつた。蹉跎たる現世の一切の快樂を捨て、幽渺さながら陽炎のあるかなきかの音聲の韻にあくがれて、長程萬里浮身をやつしたる藝術の人よ、誠に藝術に始まりて藝術に終りたるいましの生涯よ、いましてそは即ち藝術の化身であるまいか。

▲雑魚寝

虚無僧の天蓋擔ぐ月夜かな  
暫くは主人の代り置火鉢  
男山鬼門に向ひ五六杯  
月高く尺八裂りし恨かな  
宗匠の顔煤けたる花盛り  
シヨール着て良人の寢酒諫めけり  
盲人まで一寸上向く花火かな  
抹茶も狹いて見たいし尻も出るし

舌頭螺旅行

○吾人は社會なるもの、爲に事を爲すの責任を有せず、否社會の爲に盡す程馬鹿臭き事は恐らく無かる可し、如何となれば社會なるものは吾人に對して餘りに冷淡なればなり。人は各々皆社會を形成する一分子なる限りは、敢て社會の爲め社會の爲めと、甘い名義をのみ被りて事をせざるも、先づ第一に其が一分子たる、我が爲めに事を爲して然るべし、未だ自己を完全せしめず、満足せしめざるに、會社の爲めなど、騒ぎたつればこそ、時には慈善事業なる美名の下に、惡事を働かざるべからざるに至るにあらずや。

○風流なるかな乞食、吞氣なるかな乞食、與ふる者あらざれば食ふ能はず、食ふ能はざれば死するのみ、何ぞ吞氣なるの甚しきや。然も彼等は其吞氣なるを知らざる粹吞氣にして、悠々宇宙を以て家となし、其間に生活す、何ぞ風流なるや。人間世に生る、宜しく將に乞食となるべし、世界至る處皆彼等に供すべき食物を以て満されたり、而て彼等は「どぶど呉れ給へ、思み給へ」の一語を以て是を自己の食とする



を得るなり、生活艱難を訴ふる現今の社會に於て、大臣と成て或意味の乞食となり、學者と成て或意味の乞食となり、著述家と成て或意味の乞食となるよりは、寧ろ我は晴天白日の下に、堂々として乞食の本家なる門附きの乞食となるを潔しとする者なり、

○業成り名をなして靜かに故郷に退き其處に四年の閑日月を送りたるセークスピア最後の生涯こそ望ましきものにあらずや。嘗て十七年の間倫敦の劇場にありて苦しめられし心身も、此僅か四年の短き歲月を以て慰籍せられ遺憾なかりしなり、否遺憾なかりしのみならず。實に彼は人生一大満足の下に死せし者なり。彼は美人の膝を枕として死するよりは錦を着たる儘、世界の大都倫敦よりもより大なる大都として彼の腦中に印象する故郷ストラット、トフオールドを枕として死するを勝れりと信じてたる者なり。嗚呼是を以て見るも。我敢て徳富蘇峰氏の言を學ぶにあらざれども、故郷なるものは一の大なるインスピレーションなるかな。

○我に一宗教あり、呼んで肉體偶像教と云ふ。即ち美人を以て無上の有難き神とし是を崇拜するなり。素より其崇拜たるや、美人の精神に對してにはあらずして、其外貌に對するの崇拜なり。斯く言は、人或は汝の宗教は劣等なり、外面の美に迷ふ一の迷信なりと笑はん。然れども我は此宗教を以て迷信とする能はず、如何となれば人の内心即ち精神なるものは外面を見て忽ちに判じ得べきものにあらざればなり外面言語等より其者の心を推察し、彼の精神は斯の如く善良なり。實に敬慕すべき人物なりとて其者を崇拜することあらんか、時としては大なる迷信に陥るなきを保し難し、寧ろ斯る危険なる宗教を信するよりは、始めより其精神の如きは措きて問はず、唯吾人の肉眼を以て明かに見得る外貌の美を崇拜するの安全なるに如くは無し。

○豈然たる嵐次第に遠ざかりて、世界の端に落ち、此處に天地寧ろ恐ろしき程靜寂となれり、而して其靜寂たるや、嵐の未だ吹き起らざりし以前の靜寂に増したるものなるを思はしむ、然り増したるものなり、嵐の起らざりし以前の靜は單なる靜なり、嵐の吹き去りし後の靜は單なる靜に嵐と云ふ一のもの働きて成りたる靜な



り。即ち嵐は、嵐の未だ吹き起らざりし以前の静寂に増したる静寂を作らんとし、  
 鬱然たる間にも孜々として勉め、始めて是を人間の精神界の上に作り出すを得たる  
 ものなり。徳川の天下は嵐の前の静にして、維新の改革は嵐なり幾多の志士是が爲  
 に鬱然として叫び、孜々として勉めたり、而して作り出したるは明治の世なり、是  
 嵐の後の静なり、是動の後の静なり。勞力を費して得たる價值ある静なり。動の時  
 代を經過せざる静は。動を眼前に控に置くの静にして、極めて不安心なる静なり。  
 故に眞の平和を希ふ者は一だひ戦争せざるべからず、戦はずして忽ちに眞の平和を  
 得んと欲するものは痴の痴なり。

○白きものを白しと觀せし時代去りて白きものを黒しと觀るの時代來り。又再び白  
 きものは矢張り白しと觀るの時代來り。以上三時代の變遷は何を示すものなるか  
 他なし是人間の精神進化の順序を示したるものなるべし。白き物を白しとのみ言ふ  
 は餘り解釋單純にして、俗なるが如き感じせらるゝを以て、如何にもして白き物を  
 黒しと言ふて見たく成り。小さき頭を絞りてコセ／＼したる理屈を並べ、強て是を

黒しとなし、以て自ら卓説なりとして喜びたり。然るに此時代も長く續かず、白きも  
 のを黒しと言ひたがふ者のみ多くなり來りては、白きものを黒しと言ひても格別面  
 白からず、却て氣障にして厭味あるが如く思はれ、遂に又白きものを白しと言ふに至  
 れり。總て斯の如く人間は一度は迷ふとも悟りては又元に歸るものなり、故に悟と  
 は物其物の儘を言ふものにして其間には理屈も何にも無きものと知るべし。貴重な  
 る時間を費して、面壁九年勸十年も御無用、又鎌倉の座禪などは眞平御無用なり。  
 ○人は死する少しく以前に自ら其生命を擲つものなり、如何なる卑怯者と雖も昔よ  
 り死する瞬間に際して死にたくないと言ひし者あるを聞かず、天なるかな命なるか  
 などて世には人の生命を取去るを以て天の無情なるを言ふ者あれども天は決してさ  
 る無情なるものにあらず、人の死するは、其死する以前に自ら其生命を捨て然る後  
 天徐に來りて、生命を捨てたる者にとりては最も必要なる死といふ一種の無窮なる  
 ものを其者に與へ、不用として捨てある生命をば、遠く遠く人の知らざる處に運び  
 去るのみ若し病等にて見るに堪えざる程の苦をなす者に、天久しく死を與へざらば



其者は寧ろ天の死を與へざるの無情なるを恨むに至るべし。

○相對する人をして肉慾の情を起さしむる女は餘り美人に非ず、相對するも肉慾の情を起さしめざる女は甚だしき醜婦か然らざれば非常絶世の美人なり、呆れて言葉が出ないといふ事もあれば、斯る時は呆れて肉慾の情が出ないと云ふ時なるべし。而して余の經驗に依れば、其醜に呆るゝか、美に呆るゝかに從て、其呆るゝ時間に長短あり。若し醜婦なる時は呆るゝ事久しく、美人なる時は呆るゝこと暫時にして其呆氣は斯次戀愛といふものに變ず、然れども肉慾の情は少しも起らざるなり。然るに其美人と接觸する事屢々なるに及ばゞ、始めは單に斯る絶世の美人と對話するを得たるすら、已が大なる名譽の如く心得たる念が、次第に增長して、せめては斯る美人と一夜なりとも禱を並べてシンミリ夜の更くる迄何か話でもして見たくなり其時代も過ぐれば、始めて此處に肉慾といふ事を考ふるに至る。是を以て見るに、人の美人を戀するや、呆るゝ即ち呆氣に取らるゝといふに始まりて、肉慾に終る、女を見て指を啣へ呆氣に取られて茫然たる時は、抑も戀愛の初步にして、○肉慾を遂

ぐるは是戀愛の最期なり。故に人をして呆氣に取られ恍惚として殆ど其間に肉慾なといふ餘念を挾む餘裕有らざらしめたる當時の美人の力たるや、實に嘆稱すべき、肉慾を遂げたる後の美人の美たるや、憐むべきものなり。

○人生朝露の如しといふはよし、然らば人生に似たる朝露は何の如しといひて然るべきや、朝露は朝露の如しと言はんか、少し變なるが如し。人間の不公平にして我儘勝手なる是より推して知るべし、人の身の果敢き事は知れども人よりも遙に果敢き朝露に憐を催すを知らず、唯果敢しといふ事は其專賣特許券人間にあるもの、如く思ひて、人よりも果敢き人以外の動物人以外の物象に對しては一の思ひ遣りだに爲さず恰も餓鬼に物を分けて與へたる時、自分の分け前が不足なりとて他人の能くも見ずに泣顔をするが如し、何ぞ穢き根恨ぞや。



## 奸者の福音

四四

太陽は七色を以て輝き地球は翠巒白河蒼海或は種々の色彩を以て飾られたる草木等にて蔽はれつゝあり、人間も又地球を飾らんとして出だされたるものに外ならず、さればど白色人種あり、黄色人種あり、黒色人種あり、褐色人種ありて各々其特有の色を戦はせるにあらずや。而して斯かる地球を造れるの造物主は地球なる臺上に種々なる物を點々と裝り並べ、已が眺めとし玩弄物として頬笑みつゝあるなり。人間界に干戈の動くを見ては、其干戈の閃めき、人馬の蠢動の益々甚だしくなり行くにつれ、滑稽の度いや益しに高まり行くに見惚れつゝあるなり、百萬の貔貅、十萬の鱗鱗の大活動も、彼造物主なる者の眼中には如何にドロールサイト成りて映するかよ、其他人間人間の猜疑、嫉妬、戀情等に關係して爲さるゝクヨク的の動作に至りては、一々彼が眼中に映するや否や。日月を以て我は造物主が有するミッロスコープ即ち顯微鏡なりと言はんぞ欲する者なり、若し日月をして造物主が顯微鏡なりとすれば、彼造物主晝は太陽なる赫々たる鏡上に彼が公平なる目の玉を置き

人界の事は個人の間交に至るまで残らず、瞰視しつゝ有るなるべし。夜は又皎々と滯み渡る嫦娥鏡上に目を凝らし。我等人間なる者の戀愛上より演じ出す醜体痴狀をも残さず餘さず已が眺めとせんぞ瞋詰めつゝあるべし。斯くて見厭きたる時は顯微鏡を天上より取り去るにあらずや、其時や天暗々と掻き曇り日月を見ず、唯幾朶の黒雲悪魔の如く魑魅の如く搖曳し風雨のあらぶるをのみ見るの時なり、而して造物主が地球上に目を注ぎ居らざるの時なり。此處に於てか人間の或者は此時を幸としてあらゆる罪惡を犯さんとす。然れども造物主は地球上より目を放すとも、彼の命に依りて地球に派遣せられたる八百萬の神々は我等の罪惡を犯すを能く見留め、其罪相當の罰を盛り與ふるに未だ嘗て洩らす無きなり。斯くして吾人は罪を犯す能はざるなり。然れども造物主は權利を有して犯せるの罪は是を寛恕するなり、依て我は言んとす、吾人は權利の範圍内に生活する者なりと。既に吾人をして權利内に生活する者なりとせし以上は、其有する權利區域を脱せざる限りは、色を好むも可、酒を嗜むも可、人を罵詈するも可、又人を殺すとも可なり。



既に然らば他人の妻を戀するも權利の區域内に於て可なり、然れども是に手を觸れ  
奸淫するが如きは元より權利外なり。基督の言へる如く他人の妻の美なるを見て戀  
するは、唯戀ひ慕ふのみにてても其罪奸淫したるに同じとは余をして言はしむれば大  
に不可なる無き能はざるなり、唯其美なるに戀ひ焦がるゝとも其間に何の罪なるも  
のあらんや、美とは唯其女の顔面に走りたる曲線の配合が其是を見たる男の眼球に  
寫りたる一の現象に外ならざるなり。苟も善を好み惡を厭ふの人間にして、美人を戀  
ひ慕ふは寧ろ自然の理にあらずや。美貌の人は外面の美なる人なり、姿の醜なるもの  
は外面の惡人なり、善者を慕ふの人間にして容貌の善者即ち美人を戀ひ慕ふは當然  
のことにして何ぞ不可なるあらんや。他人の妻を戀慕するものあらば、其戀せられた  
る妻の夫たるべきものは寧ろ其者に對して敬意を表し禮を述べざるべからざるの義  
務を負ふものたるを信ず、如何となれば彼は我妻の美を稱へ居るものなればなり。  
彼は他人の妻なりとて、美なる者を見ても強て己を欺きてまでも醜なるものとして  
見る能はず。人の美醜を論定するに際して人の妻たると妻たらざるとは敢て關する  
るなり。

所にあらざるなり。美なるものは如何なる方面より見るも美なり。既に美なり是を  
戀ひ慕ふ又不可とする能はざるにあらずや、前にも言へる如く人間は善者を愛し、  
惡者を惡むの共通性を有するものなるが故に、容貌の善者をも慕はずには居られざ  
るなり。

人あり、然らば他人の妻を戀慕するも可なりやと言はゞ、我は全然可なりとは言ひ  
得ざるなり、如何となれば人間なるものは己の情に打勝つ事に於て甚だ難きを覺ゆ  
るものなればなり、故に或者を戀すれば唯單に戀したるのみにて止まらず、遂には  
戀したる結果として肉慾を遂げざれば止む能はざるに至る。彼のバイロンは希臘の  
滅亡を默視するに忍びずとて身を軍籍に投じ、バイロン將軍の勇名を轟かしぬ、然  
れども肉慾の情には打勝つ能はざりしにあらずや。こゝを以て他人の妻を戀せんと  
する者は、先づ我れ能く我が肉慾の情を制し得るや否やを堅く確めたる上にあらざ  
れば能はず、既に我れ我が惡を制し得んと信ずる所にして鞏固ならば、前にも述べ  
たるの理由を以て他人の妻を戀するも敢て不可にはあらざるなり。論者如何？



蚯蚓の小歌

人は鮎功名は水にあらねども  
 われ若鮎の水上进行を慕ふ。  
 けなげなり十五の娘くすをれて  
 胸にあやしきものを秘し置く。  
 寧ろ我運命の前に跪き  
 男五尺の身を捧げんか。  
 聞きし音にふさわしからず琴の主  
 斯くと知りせば音を樂みし。  
 憐れなる二上り調を聞かまほし  
 せめてあの夜の思出にせん。  
 射る征矢の虚空に見けて星ふる夜  
 あやしき思我が胸をつきぬ。

うらぶれて世に立つすべを失へば  
 達磨の鬚も秋の風吹く。  
 枯れ枝に三日月われて雲低く  
 あちらこちらに蝙蝠の飛ぶ。  
 濁醪も平和の味のするどあらば  
 シヤンバン酒をわれ望まんや。  
 磯のあなた波音高く潮けふる  
 琴の音幽か躍る神幽か。  
 時鳥鳴いて口説いて落したる  
 三日月の利鎌野に草を刈る。  
 佇めば螢流れて川上に  
 尺八の音の絶へては續く。  
 夏雲の崩れんとするを支は立つ



桐の青葉に大粒の雨。  
泣いて呉れ逆も獨りに泣き切れず

情の羈絆此若き身に。

麥畑に紫のリボンはたと消えて

間も無く起る草笛の音。

夕立にかこつけて寄る妹が家に

晴れ行く空を怨みけるかな。

戀知らで歌知るものか今の世に

我は里の子いと不粹の子。

金粉を振り散らしたる星の夜に

永却の髓に立ちし詩人。

朧夜に櫛を拾ひし櫻蔭

誰が戀卷の一ペーチ。

細殿をながしめに過ぐ十二一重

袖名香の薫流るゝ。

君が爲め里に埋るゝ我なれば

鍬とるな御手膚な荒しそ。

時しあらば鞠りても見せん此胸を

我も男の血潮は紅し。

落日を孤城に望む思かな

此身落武者影細り行く。

友の人四疊半なる理想境

あの子この子の肉二つ。





## 病氣にて歸宅中赤川菊村氏よりの書翰 (第一節)

寛次郎君は判頭東京は人の子の居らるべき處に非ずとの定理をして愈々真ならしめたる由御同様弱きからだには直接の苦痛に御坐候なんでも餘程の御攝養にて再び帝都に入るの賦を拜見したきものに有之候夫の巖頭感あたりは君には定めし馬耳東風にて御過ぎの事と深く羨望に不堪候比較的冷靜の頭腦を抱居らるゝ人は最終の勝利者なりと君の様な人によりて愈々此意を深くいたし申候僕など未だショツペン様の哲學とやらは深く見も仕らざりし故なんでもなげに打過さしたるもの、對岸の火車視す譯には參らざりしに候この子未だ迷の子惑の子何日か悟得の境に入り得るにや身体は弱し學は淺く境遇は境過なり何となく氣も心も減入る様に有之候早稲田は君の立脚地として適當也とは云はれいて高師帝國大學あたりの學關と比較して餘程の上位にあるものと心得居り候が真に候べきか近頃は田舎に埋れ候爲め散々のグチになり甚だ困り居り候御察被下度候

明治三十七年十月五日

赤川源一郎 拜

## 富樫寛次郎君

## ▲色 男

色が白くて鼻筋通り、御目はぼつちり眉一文字、口は蕾の花頬に咲く、頬に咲いたは櫻の花か、透き通る様な櫻顔、誰に見よとの男ぶり、分けた御髪を亂さぬ様に、男振だけ振つてもよいが、おや翻れます愛嬌が。

## 答菊村氏 (病中執筆)

盡日病纏に細驅を横へて轉た枕頭の寂寥を覺ゆる折柄、計らずも君が尊墨を手にす空谷の聲と豈に嬉しからずとせんや。されど翻て靜かに我が身を觀し去り觀し來れば是一個無爲の風來坊、此處に至て我は寧ろ君が未だ我身を忘れ給はずして尊翰を被下るゝを苦しく感ずるものなり。否獨り君のみに非ず、世間も未だ全く我を忘却し呉れざるを極めて痛苦に感ずるものなり。始は脱兎の如く終は驢の遅々たる歩にも如かざるは、是吾に伴ふの公式なり、嘗て帝都に上りし當時は其意氣昂然、大口を開きて、寛次郎の面が愈々江戸表に現はれたからには娑婆がグラノ、動き出すが、然らざれば自ら我を折りて身震ひするまでの事と、徒に大をのみ決め込み、身の程も顧みず衝て碎け上の猪武者、衝らざるに碎くるとは露識らずして、揚々早稲田の學關業々團々雲と集ひ玉と散らばる濟々たる英才秀才の眞只中其身を容るれば我が馬低きが如く、又眇たる屑星群星と光を争ふ能はざるか如き感のせられて、唯懸汗の背に溢るゝのみなりき。而して斯く我が行爲の盲蛇に類したりしを知るも共



に、我が冷靜なる頭腦の歴史のページが開かれたるなりき。

以來次第に嵩と來る常識と、次第に秀で來る凡骨とを喜び、月を關する三四ヶ月、俄然世人不多く文筆を執る者をして騒がしめたるは藤本操君の巋頭一件なり。余は此件の起るや其影響其餘波が体の身邊を襲ひ來るかど始めより少からぬ恐怖心を以て迎ひたり。然るに幸にして、馬耳東風とまでは行かざるも、兎に角文人先生連の御騷動に與らず一宇宙を解せざればとて死せざるべからざるの理何處にか有る。鳥居の小鳥は籠を天地として歌ふに、嗚呼宇宙を籠として歌ふ能はず徒に籠を苦に病み胸を搏ちつけて死する小鳥は憐むべきかな。悠々たるかな古今、茫々たるかな宇宙、其れにて理は盡きたり何を苦んでか理外に理を探らんとはする何に騙されて闇の夜を暗くして分らぬもののみ判じ、一步進んで暗くして分らぬは闇の夜なりと判ずるをなさざるか。未だ生ある間は大なる悲觀は大なる樂觀に一致すとまで叫びたる者が何の必要有て死を敢てしたる。汝の死は餘りに無意義ならずや、若し死に依て永久の理を得んと欲したるなりと言ふか、其れ或は西詩の趣はあるも死は死なるを如何せん。無意義なり無意義なり、汝の死は餘りに無意義極れり、是とも非とも我は無意義を談ずるを好まざるなり」と

以上の如く一呵し去れば、譬ひ理屈は無鐵砲なるも自ら深く信ずる處有るが如く脚すがくしく成りて世の一種の流行の渦中にも捲き込まれず事澄みと成りたるは小波の伽話にあらざるも、先づ目出度し〜の方なるべし。君が深く羨望に不堪候とは此處等の消息を言はれたるならんと領く、然し領かれぬは君の僕を目して比較的冷靜の頭腦を抱口居らる、とは言れたる一事なり。是現在の僕に對しては餘り難有き譚辭に非ず。總て物は比較とは言へながら斯かる場合の比較的はチト變ならずや其後の僕を知らざる君としてはさして不思議は無かるべきも、冷靜枯木の如く趣味も情も忘れ果てたる今の僕の身としては、比較の二字は寧ろ無くてもがなと思はるゝなり。

シヨッペン様の哲學とやらは深く見も仕らざりし故その御丁寧なる御斷り、余も御同然、然し早稻田の先生などは數學も科學も碌に知らぬ奴が哲學などを云々する權



利は絶對無いと叱り飛ばし候。

この子未だ迷の子何日か悟得の境に入り得るにやとの御言葉、是をは甚だ失禮ながら我輩教師の位置に立ちて悟得の境に入るべき初步を御教授可申上候。其は先づ第一に君が口にするこの子、迷の子、悟、迷、等の酷味ある言葉は以來決して御用ひなさらぬ事最も肝要ならんと存候。未だ迷だとか悟だとか口にし居る間は悟得の境などはなか／＼遠き様に私には思はれ申し候。然し是も我輩如き愚物一個の意見なれば如何のものにや。

境遇は境遇なり何となく氣も心も滅入る様に有之候との御言葉には、如何に冷靜なる私と雖も全身の血を傾けて同情可致候それに付けても君は本月の文藝俱樂部に載せられある眉山の凡人界といふ小説を御覽なされ候や、私は一讀して君が境遇と思ひ較べ詰らぬ婆心を起し候。

早稻田は高師、帝國大學に比して餘程の上位にあるものと心得居り候が眞に候べきかとの御言葉、眞面目な顔をして手前味噌を掲ぐるも妙ならず、御答は御免蒙り候

然し君が高師と帝國大學と一緒にせられたるには、艶なる北の方の温かなる御手を握りながら鴛鴦の徒散歩なさるゝ君にも似合はぬ師範學校臭き事をと徐に頰笑まれ申候。御遊びに御出被下折角奉待上ります。

附録として

東京の海老茶辯 (君に對する)

まあ貴方愚痴つぱく成て困つたなんて大馬鹿世帯地味たる安く無い事をかつしやいますね、そんな事を御言ひなさるんなら前兼ねて税を懸けて置いてからにしなさいよほんとに。然しまあ御目出度い方だね思ひつ思はれつ二人をふ差向きで、しつ濃い戀愛談でもなさつて居りや何時も酷が四つといふわけです、まんざら戀愛は神聖なりされど結婚は惡魔なりつてな方でもなからふつてね……。私などはほんとに貴方を羨ましく思ふわ……。人はちつと計り苦勞をしても亦人になんか笑はれても自分でさい本能の満足を買ひ得りやそれで澤山だといふもんだわ……。未だ第三者が御出來でないの？、未だつてね、其れは至極結構ですよ、どうせ子供なんか出



來ると愛情が子供にも及んで是迄は夫婦二人の間にしか働いて居らなかつた愛情が自然此度は三人の間に働く事に成るんですから、夫婦間の愛情といふものが子供の爲に側から奪はれて薄らぐわけに成るからね、ですから子供なんか餘り急いで拵へなくツとも宜いんですよ、其れが却て夫婦間の愛情を完全の域にまで發送せしめる秘訣とでも云ふようなもんだかも知れませんよ。

漫言多謝頓首再拜

明治三十六年十月八日

富樫寛次郎

日晡れて路遠し此脚氣足を如何

(脚氣病中雜感の中)

爲すべきものが爲されて爲されたるものと成り樂むといふ一の働きが樂といふものを費して其が終ると、自分の樂の一つが此廣い世界から消えてしまつたので、祭典の日に小躍りする程喜ばされた子供が、翌日に成て物足らぬ様な心地がせらるゝ様に、自分は過ぎ去た樂の影ならぬ影を逐ふてひたぶるに消へ去りし夢の彩を目の前

に弄ぶのである。然し唯其は髣髴たる一の影に過ぎない、然も實体に添ふの影に非ずして、別に影として存在したものゝ影それとでもいふべきのであらふ。

僕は嘆かずに居られない、自分の身に尾の如く長く引かれつゝある過去なるものに對して、今更に恐怖の念を抱かずに居られない、否樂といふ動作が樂を掻き消す様に、嘆が嘆を掻き消し恐が恐を掻き消すのと迄は今深く思ひ及んだでは無いが唯丁度泣きたい時に赤ん精一パイ泣き通せば、爲すべき義務が過ぎ仕事が終わつたかの如く何處やら氣持が能く成るといふ様な、至て單純な考から嘆く事を敢てし恐るゝ事を敢てするのらしい。

噓々あの時は面白がつた、あの時はまた自分も無邪氣であつたし、あの時は誰々も何々して遊んであつた、彼は我に親接であつた、又あの時分は無邪氣といふ程でも無かつたが、今の様な世間的の考が頭に毛厘無い時で、自分と彼との交りの間には世間で少しも知らぬ言ふに言はれぬ樂があつたものだ。然るに其れも是も皆今と成つて見れば、時といふ潮流の爲に流ひ去られて無に歸してしまつて居るに、此時とい



ふ流は其源を何處より發し流れ行く末は何處だとも知ることが出来ない、又想像の手も届かぬ程長く長く古今の間に蟠て、遠き昔より依然として變らずに流を持續して居る。萬物に悉く皆滅亡の時期が到着しても、未來永却時なるものは亡ぶること無くして其流を持續するであらふ。

而して自分の立脚地を瞰下すれば、其時なる急流の眞只中に有るのだから恐ろしくも成るではないか。然も自分は唯立て居るのでは無い、時の潮流と等しき速力を以て立た儘流されて居るのだと氣が附いた時に、驚きながらも或事を流の速力と等しき速力を以て是非爲さなければならぬ身だと感じたので、一時に非常に忙はしく成り、其處等に有合ふ幾多の書籍を手當り次第無闇矢鱈に引き寄せて、皿の様な目をして大急ぎに読み始めやふとするのだ。自分は其時に嘲笑の聲を耳にしなないならば即座に読み始めるのだが、其舉働が餘りに現金なので徐に突止の念に堪はぬ様に成て、呵ら呵らと笑つた。すると不思議にも、周圍の壁や襖からも、鼻を突かれて峰が騒ぎ出した如くに嘲笑の聲が一時にドツと起るのを聞いた。其を始めは唯自分が

笑つた聲の反響だと思ふて居つたに、能く耳を澄して聞くと、其は全く古今東西の成功者が皆群つて來て、自分を中に取捲いて高聲に嘲聲するのである。此時自分は奮然として立ち上り大なる成功を一掴みにして、彼等嘲笑者の頭上には是見よがしにたゞきつけて呉れやふと思ふたが、残念ながら足が麻痺して少しも立つ事が出来なかつた。世に憐なるは脚氣の病毒が精神に迄も浸み込んで、自ら毅然として世に立つの氣を失つた精神界の大患者なるかなと慨かざるを得ない。

### 洛如花

さやかき青き元祿の、  
廓くわの武士の忍ばれて、  
格子に春の月かすみ、  
美人綽約はんべるも、  
沈鬱うれひは盃\*の澱\*となる。



細雨静かに夜は暗く、  
滯<sup>ひ</sup>れて撓<sup>しな</sup>れて力無き、  
景<sup>けい</sup>天<sup>てん</sup>ひかり窓切りて、  
蚊遣<sup>ぶんせん</sup>にけふる忘<sup>わす</sup>想<sup>そう</sup>の、  
圍<sup>い</sup>の<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>に迷<sup>ま</sup>ふ身<sup>み</sup>か。

たみ濼<sup>た</sup>場<sup>ば</sup>の時<sup>とき</sup>は來<sup>き</sup>て、  
濁<sup>た</sup>膠<sup>こう</sup>汲<sup>ひ</sup>みて祝<sup>いは</sup>賀<sup>ひ</sup>せし、  
隣<sup>りん</sup>家<sup>か</sup>の<sup>の</sup>農<sup>のう</sup>の<sup>の</sup>歌<sup>か</sup>絶<sup>た</sup>えて、  
環<sup>わん</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>打<sup>う</sup>つ拍<sup>ぱく</sup>子<sup>し</sup>木<sup>ぼく</sup>に、  
已<sup>い</sup>が頭<sup>かぶ</sup>腦<sup>のう</sup>を敲<sup>たた</sup>かるゝ。

婆<sup>た</sup>歡<sup>かん</sup>喜<sup>き</sup>温<sup>ぬる</sup>みを失<sup>な</sup>ひて、

庭<sup>てい</sup>竹<sup>ちく</sup>雪<sup>せつ</sup>に折<sup>お</sup>る、夜<sup>よ</sup>に、  
奥<sup>おく</sup>座<sup>ざ</sup>に坐<sup>ま</sup>せる嚴<sup>げん</sup>君<sup>きん</sup>の、  
咳<sup>げ</sup>聲<sup>せい</sup>聞<sup>き</sup>をやぶるとき、  
肩<sup>かた</sup>身<sup>み</sup>狭<sup>せま</sup>きは誰<sup>た</sup>が罪<sup>つみ</sup>か。

僧<sup>そう</sup>儼<sup>げん</sup>經<sup>きやう</sup>を讀<sup>よ</sup>むとて、  
此<sup>こ</sup>身<sup>み</sup>に何<sup>なに</sup>の花<sup>はな</sup>雨<sup>あめ</sup>りし、  
彌<sup>み</sup>生<sup>せい</sup>吹<sup>ふ</sup>き來<sup>き</sup>る花<sup>はな</sup>鞞<sup>くわん</sup>扇<sup>せん</sup>、  
我<sup>われ</sup>が戰<sup>せん</sup>争<sup>じやう</sup>を吹<sup>ふ</sup>き忘<sup>わす</sup>る、  
あゝこれ惱<sup>なや</sup>みこれ悲<sup>かな</sup>嘆<sup>たん</sup>。

口<sup>くち</sup>に壯<sup>さう</sup>語<sup>ご</sup>は吐<sup>つ</sup>くとて、  
吐<sup>つ</sup>かぬに勝<sup>か</sup>る苦<sup>くる</sup>しさよ、



剽輕の朋友を相手どり、  
意氣昂然とかたるとも、  
蔭には折れて獨り泣く。

泣くな勇めよ呼べ叫べ、  
われ學問の奴にあらず、  
角ある文字に角となり、  
墓に走せ行く骸骨留め、  
智慧を塗るとは是痴漢。

學士と成るも鬚あるも、  
世の臨洮の地を踐みて、  
汝が脚跡をかへりみよ、

巨人の足に恥ぢざるか、  
蝸牛も滑ればあと盡く。

されど誠をあかさんか、  
是は罪ふかきのがれ言、  
いづれわれとて青年の、  
血潮に燃る身ならずや、  
功名の念を捨てられず。

戀にやふれて自棄酒に、  
慰籍をさぐる者よりは、  
學にやふれて狂ひ出て、  
筆に継りて泣ける子を、



憐ども暇よかみあらば。

土中にうもる、蝓まごも、

蟬と化しては歌ひ飛ぶ、

延びぬ翼に飛ばんより、

しづかに里さとに埋うもれて、

時の至るを待たんかな。

常山の蛇だにあらざれば、

頭かしらと尾おしりとのはやわざに、

才子と我は成るを得ず、

緇こ戯まに落ちて痛いたむより、

天職てんじくのもとに旗揚げん。」

筆屋上筆をわれに賣れ、  
天崩るゝとふそれたる、  
杞國の人にあらざるも、  
誰かこの手に筆を見て、  
天崩るゝとふそれざる。

旗は揚らず鼓は鳴らず、  
名は三文の部に入らば、  
吳興山中のおくふかく、  
郡の文土をしめすてふ、  
洛如花となり我咲かん。

人よ來りて目を呉れて、



竹と思うて過すなよ、  
 陸澄りくちやうに行きこれを問へ、  
 彼は得意のまなざしに、  
 文士の花を告げかたる。  
 蓮も百合も微菌かび生じて、  
 其を口にせば酸き世に、  
 香も無き花を開きつゝ、  
 詩歌に登るを願はねば、  
 柔手やわてに掛る苦もなくて。」

(三)(二)(一)

景天けいてんは又丹鳥丹良にんりやうなゆ云ひ螢火えいかの事なり  
 炎場えんばは農事畢り場地を轄とらふことにて民其收穫を喜び最も得意の時なり、  
 環人わんじんは環人にして見巡り番人の事なり、

(六)(五)(四)

婆歡喜ばくわんぎは炭團たんの事なり、  
 嚴君えんくんは父の事なり  
 花雨はなうると云ふ語は曹洞宗の開祖道元羅漢講式を誦したる時天花庭前に降り積ること一寸と佛書にあるより出でたり古くは支那にも此故事ありしならんが今詳かならず、

(七)(八)(九)(十)(十一)(十二)(十三)

花鞞扇はなぎんせんは花信風と同意にして花を聞く風なり花鞞風とも云ふ(書蕉)  
 臨洮りんたうは昔支那にて長安の西金城の南を總稱して言へり、  
 蝓蟻こもぎは一名蝓蟻虫の名なり此虫化して蟬せみとなるといふ、  
 常山の蛇へびとは人頭を撃たんとすれば尾を出し尾を撃たんとすれば頭を出す蛇なり  
 緇戲しやくぎは俗に綱渡りなり、  
 洛如花らくかは吳興山中の植物にして竹に類し實は莢状に似たり郷人は是を見以て見慣れぬ奇なる植物とし近郷中の物識り陸澄といふ文士に問ふ澄は得意の色をなし答へて曰く「洛如花と名づく郡に文士有れば則ち生ず」と(雲仙雜記)



笛

竹に七つの孔開けて、  
笛と呼ぶる、汝が身の、  
そも如何なれば斯く迄に、  
己が心緒を狂はする。

胸の血潮の溢れをば、  
虹なす氣息に吹き流し、  
指頭しく振ふ時、  
笛の秘密の躍るかな。

噫々其昔月の宵、  
今は亡き身の彼の君が、

吹き澄したる笛の音に、  
み空の雲もたゞよひき。  
いとも冷たき此室に、  
獨り笛のみ温がく、  
焼けて歴然残れるは、  
誰が唇の紅の斑点。」

自白の賦

余の學校時代成績甚だ良からず先生といふ恐ろしき者余に向て曰く「汝の賦を讀みしを以て其當時の學問を爲せ」と其當時歌ひしものは是なり、

小天地御し難きかな、  
得意とす其自らを、  
能無きを耻とせずして、  
破れ太鼓音は襲々と、



偽りの哲學に凝り、  
先生の問に答へず、  
自らに自ら答へ、  
答へ得て餘有りとは、  
何たるの自惚なるぞ、  
今にして悟れるふりか。

悟るふり其ぞ自惚、  
嗚呼と云ふ口の嘆の、  
源を心底よりせず、  
ラビリンス廻る幾年、  
得意の子夢の中にて、

コナンドイル笑ふも聞かず、

ヘブライの預言者言ふと、  
其言を楯にたのみて、  
色好む世の人のごと、  
我我に迷ひ行くかな。

迷ふ者飽くまで迷へ、  
迷其れ其者の望よ、  
闇を縫ふ螢火の影、  
身のみ照り行先知るか、  
教鞭を高く取る人、  
我に言ふ勉強せよと、  
暖かし君が言の葉は、  
さあれ猶我をゆるせ、



我が心弦を放れぬ、  
拗れ矢に的を射んのみ。」

### 神居古潭

神居古潭は北海道唯一の名所なり明治三十五年五月此處に遊ぶ吟あり即ち是なり

青龍泳ぐと見しは水の渦卷、  
岩壁に衝て碎けしは己が心、  
聳いて高き懸崖地軸の尖か、  
われ俗才の子この景に對し、  
身は微かに人小なるを感ず。  
背戸に飼ひ置きし檻の小熊、  
隙渡る、月に熊の笑を笑ふ、

其夜西長晝の狩につかれて、  
雄大のアイヌ此大觀に坐し、  
酒に蕩然とバラリヤを彈ず。

俗才の産なる文明は來りて、  
人種の競争其處に塵をあげ、  
雄大の民族を狩りたてたり、  
神居古潭の神こそをあげて、  
「汝大を保ち我を愛し得るや。」

景は大に過ぎたり智の民に、  
神居古潭をアイヌに與へよ、  
蝦夷節はその斷岸にひゞけ、



